

河原

帰宅して、テレビをつける。

着替えながら、冷蔵庫を開けながら、画面をちらちら眺める。

ドラマやニュースを見ているわけではない。

番組の合間ばかりを、目で追っている。

亮二の作ったコマーシャルが気になる。

テレビをつければ、亮二に会えるかもしれない。

亮二は、コマーシャルディレクターになったらしい。

久しぶりに出かけた同窓会は、亮二の話題ばかりだった。

それも、けっこう有名な。

うそー！といいたくなる。

が、みんなが口にしていいるから、本当なのだろう。

皆が、亮二のことを自慢するのが、なんとなく腹立たしかった。

嫉妬なのかもしれない。

涼子はそう思う。

仕事は、以前ほどうまくいっていないから。

それだったら、同窓会の場に、行かなければいいのだ。

ようやく、涼子が心待ちにしていた画面になった。

田舎の中学校。

教師の声。

生徒たちの騒ぐ声が聞こえる。

風に乗って。

河原が画面に映る。

山が間近にせまる。

木々の緑は濃い。

車道からそれて、急な坂道が川に向かう。

簡単な橋がかかっている。

欄干も何もない。

ただの板状の橋。

川に飛び込める。

小学生でも、きっと怖くない。

水量は少ない。

制服を着た男の子と女の子。

女の子は、とびぬけて可愛い。

ふたり、坂道を駆け下りる。

橋の真ん中で、男の子はズボンを脱ぎ、開襟シャツも脱ぎ棄てる。

ポンと川に飛び降りる。

女の子は、橋を渡らない。

坂道をそのまま、河原に降りていく。

ふたりは別々に、川で遊んでいる。

ふたりの周りには、たくさんのトンボ。

トンボは水面すれすれを、軽やかに飛んでいく。

蝉の鳴き声がにぎやかだ。

学校のチャイムが、かすかに聞こえる。

遊んでいたはずの、男の子の姿が消えた。

女の子は、河原の石を拾う。

ひとつ拾っては、ひとつ捨てる。

最後に、こぶし大の赤い石を拾った。

水辺から離れたひなたに置く。

遠くに見える男の子。

折りたたみ椅子をわきに抱えて。

走る、走る。

坂道を駆け抜ける。

川の真ん中に、男の子は立って、椅子を開く。

女の子の名前を呼ぶ。

女の子はゆっくり歩いてくる。

スチールの椅子に、女の子は座る。

川の水は浅い。

足首の先くらい。

座って、女の子は川面を眺める。

遠くの山を眺める。

「あっ、勝手に使ってる」

涼子がつぶやいた。

椅子のもっと先の河原で、男の子は石を投げて遊ぶ。

いつの間にか、また、川の中。

女の子の足をカメラが追う。

ほっそりとしたくるぶしの周りを、小さな小さな魚が泳ぐ。

群れを作って泳ぐ。

別の小さな魚が通り過ぎる。

水の中の小石、小さな魚、女の子のきれいな足。光が反射する。

画面が変わって、ジュースの缶が川の中に。

コクコクとおいしそうに飲む音だけがする。

亮二、なによ。

このジュースだけじゃない。

あんたが付け足したのは。

画面に向かって、涼子は悪態をつく。

いやあ、あの子、めちゃうくちゃ可愛いだろ。

そこがお前との大きな違いだよ。

亮二なら言いそうだ。

たしかにね。

あたしは女子柔道部の主将。

ひよろひよろの卓球部員にあんたより強かったからね。

あたしは、あんたが持ってきてくれた椅子に座ったけど、河原の石投げはあんたより飛んだし。

四十近い亮二なんて、想像もつかない。

私たちの中学校は、ジュースなんて売ってはいなかった。

だから、これは私たちの夢。

足首まで川につかって、ジュースを飲むのは。